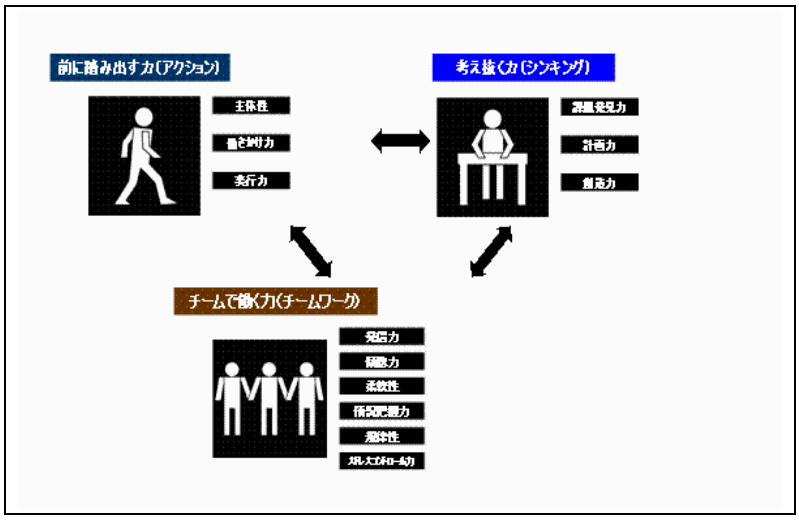
週刊センターニュース No.331

Center Research Higher Education Evaluation Student Support System

第３３１号（２０１０年１１月１日）毎週月曜日発行
発行：金沢大学　大学教育開発・支援センター
URL : http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 経済産業省主催／河合塾主管「社会人基礎力育成事例研究セミナー」参加報告１ ○●○

文部科学省中央教育審議会が提言した『学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）』（平成 20 年 3 月 25 日）は、①「三つの方針」（AP・CP・DP）②FD/SD や内部質保証システム等の環境整備、をその主要ポイントに挙げ、また「学士力」なるものを定義し、参考指針として大いに議論すべきことを謳っていることは、本誌でも何度か取りあげている。ほぼ時期を同じくして、経済産業省（以下、経産省と略す）でも、職場や社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力を「社会人基礎力」と名付けて発表（平成 18 年 2 月）し、その育成や評価の取り組みを進めている。



社会人基礎力は３つの要素と１２の能力で構成されている。その要素は①、「前に踏み出す力」②「考え抜く力」③「チームで働く力」で、さらにそれぞれ①主体性、働きかけ力、実行力②課題発見力、計画力、想像力③発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の各能力で構成される（左図は、http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf を簡略化したもの）

普及活動の一環として「体系的な社会人基礎力の育成・評価システムの普及に向けた事例研究セミナー」が今年全国７都市で実施され、うち 10 月 11 日(月)の仙台会場（仙台国際センター）セミナーに参加したので内容の一部を簡単に紹介したい。最初の、事業事務局担当者の説明では、普遍的な能力概念として、しかし大学という制度に対応する「学士力」、就学という機能に対応する「就業力」とは異なるものと考えており、さらに「学士力」が大学独自であるのに対し、「社会人基礎力」は絶対条件であるとみなしている。欧米と異なり、雇用経験を持たずに大学に進学する日本で、大学教育がそのギャップをどう埋めていくかが課題となるわけであるが、注意すべき点の一つに、経産省調査で、学生自身が不足していると思う能力と企業が考える学生に不足している能力との認識にミスマッチがあり、学生は技能（語学・専門知識）不足を挙げ、企業は主体性・粘り強さ（前に踏み出す力）やコミュニケーション力（チームワーク）不足を挙げていることである。つまり、大学の環境では（企業が求めるレベルの主体性・粘り強さを養うには）まだ厳しさが足りないとみなしているわけである。一方で同調査は、アルバイトやサークルの場で社会人基礎力を高めているようにみえるが、やり方次第で学生参加型ゼミがその力を大きく伸ばす可能性があることも示している。さらに別調査（吉本圭一研究代表「卒業生のキャリアと大学教育の評価に関する日欧調査」）の知見から、卒業生が大学授業

の特色を振り返って、日本が世界的にみて教員主導・理論や概念枠組を重視する傾向があり、グループ学習、経験的・実践的知識の軽視傾向が強いことが分かっており、知識教育を軸にしながら、知識の活用や学ぶ意欲を鍵として、実践教育を取り入れ、また教職員にもそのメリットを感じられるようにするかが大切であると述べていた。

社会人基礎力を育てるためにポイントとなる考え方は何か？現場でどのような取組を行えばよいのか？セミナーでは、具体的に 5 段階のステップモデルが提示された。つまり、第 1 ステップとして前に踏み出す力を中心に育て、第 2 ステップとして考え抜く力を中心に育て、以降チームで働く力中心（第 3 ステップ)、振り返り・価値付けといった気付きによる社会人基礎力の定着（第 4・第 5 ステップ）というものである。段階にした理由は、大学の変わりにくさを想定し、少しずつ行いメリットを感じながら無理なく上げていけるようにとの配慮がある。段階が進むにつれ、運営者やファシリテータのかける手間が拡大・増加するものの、一段階ずつであればその実現は難しくなく、またそのプロセスにおいて、個々の教員が専門分野や授業方法に合わせて、最適な工夫を加えていきやすいと考えている。具体的にみると、第 1 ステップでの最も基本的な考え方が、期待を持って（外部の立場の人から）役割を学生に提示し達成させ承認することで、学生に自信をつけさせ能動的な行動を促すことにある。第 2 ステップでは、問題解決プロセスを体験させ、失敗・成功を繰り返しながら、思考を深めていくことを意図している。第 3 ステップではグループ活動の場面を取り入れ、自分の考えを引き出し可視化することで、前のステップの効果が様々な点で向上でき、傾聴力等も自然に引き出されるということである。第 4 ステップは、活動内でうまく発揮できない場合に、社会人基礎力がいかに重要なものなのか価値付けを行い、その上で自らの活動を振り返り、実現のために何が必要でどう変えていくべきか気付かせ、そうすることで基礎力をより定着させることができる段階となっている。そして第 5 ステップは、プログラム（プロジェクト）の最後だけでなく、進行中（途中段階）で価値付けや振り返りを組み込んで、基礎力と活動レベルの相乗的な向上をねらっているところに特色をもっている。

次回、複数の大学における社会人基礎力育成の実践例について、個別科目において社会人基礎力育成をどのように取り入れているかを含め、ステップに対応させながら紹介し、また評価・振り返りがどうあるべきかその方法やツール開発（の実例）にも触れていきたい。

※関連する情報は、http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htmで参照可能です。

（文責：評価システム研究部門　渡辺達雄）

○●○　センタースタッフの研究成果公開活動記録（2010 年 10 月）　○●○

教育支援システム研究部門

- 青野　透「発達障害学生への配慮義務とＦＤ・ＳＤ－公表すべき教育情報として－」『私学経営』429 号（2010 年 11 月）、11-17 頁
- 山田政寛、国際会議 AACE e-Learn 2010（Orland, FL, USA）にて研究成果発表（査読つき）；Yamada, M (2010) The Development and Evaluation of CSCL based on Social Presence, Proceedings of e-Learn 2010, pp.2304-2309
- 山田政寛、国際会議 ICERI 2010 にて採択（研究分担者、第 2 著者として）（査読つき）；Goda, Y., Yamada, M., Kato, H., Matsuda, T., Saito, Y.,　Miyagawa, H(2010) Preliminary Development of Learner Support Prediction Model For E-Learning Based on Self-Regurated Learning Factors, Proceedings of ICERI 2010, in printing

評価システム研究部門

- 渡辺達雄「韓国の専門大学教員の資質に関する研究」日本産業教育学会第 51 回大会自由研究発表、2010 年 10 月 17 日（東海学園大学）